
銀色の道具

阿井植夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の道具

【Zコード】

N3192H

【作者名】

阿井植夫

【あらすじ】

通信販売でピンセットと虫眼鏡を買つ。写真の中の人食べられる道具だ。色々な人食べていく、美味しい人、不味い人。そんな僕が最後に興味を持ったものとは……。

グラス一杯の水で溺れそうになつていた僕を助けたのは、真っ赤なハーレーに乗つた郵便配達人だつた。

「お届ものです」

自分宛に小包が届いた。差出人はいつも使つてゐる通販会社だ。中身はピンセツトと虫眼鏡だ。一見して昆虫採集でもするようだが違う。いや、採集というところは合つてゐるかも知れない。これは人を狩る道具だ。使い方は簡単だ。この虫眼鏡には照準を合わせるために目盛であるレティクルが付いてゐる。虫眼鏡を覗いてレティクルが十字に交わつてゐるところで対象物をとらえればよい。この場合の対象物は写真週刊誌に掲載されている写真の人物だ。レティクルの中心でとらえてピンセツトでつまむ。そうすると写真からきれいにはがれてくる。それをそのまま生のまま食べる。よく咀嚼して味を確かめる。食感と味を十分に楽しんで嚥下する。後は腹が膨れるまで同じことを繰り返せばよい。最近では週刊誌の顔でもある話題の女優を味わつてみる。美味しい。正直、人物がこれほど美味しいとは驚きだ。そんなことを数日続けてゐるうちに、家にあつた写真のほとんどを食べつくしてしまつた。

困つたことに家にはそれ以上食べられるような写真がなかつた。それでもどうしても人物が食べたかった僕はカメラ片手にベランダに立つた。ここから道行く人に向かつてシャッターを切るのだ。1時間ほど撮りたまると写真をパソコンに取り込んだ。そして、徐にプリンターが動き、写真が出来上がつていつた。犬の散歩をする人、ジャージでウォーキングする人、初老の男性などを食べた。不思議なことにピントがずれて写つた写真はやはりぼんやりとした味がした。一番美味しかつたのは、流行りの服を着た二十代の女性だつた。そんな風に僕は通行人を撮つては食べた。何日続けただろうか、そつしているとだんだんと通り過ぎる人数が少くなり、ついにはほ

とんど人が通らなくなつた。また僕は食べることができなくなつてしまつた。仕方がないのでしばらく新聞の写真で食いつないでいた。やはり腹黒そうな政治家などはそれ相応の味がするものだ。そういうものばかり食べているとたまにはフレッシュなものが食べたくなつてくるものである。

月××日。ついに僕は膨大な食糧を見つけた。パソコンで見ていたアイドルサイトで虫眼鏡とピンセットを使ったのだ。そしてみごとに食料を得ることに成功した。検索すれば膨大な数の人物が出てくるのだからこれほど良い食糧源はない。よく味見してみると若い方が美味しいらしい。しかも、少年よりは少女の方が美味しいようだ。コリコリとした食感に独特の風味があつて何とも言えない美味しさがある。それから、肌の色は味に関係ないらしいということが分かつた。

とうとう僕はグルメになつた。これで、世界中の美味しいものは僕のものだ。今日も世界中のサイトをめぐつて美味しいものをつまんでいる。食べ終わつた人物の映つていた所がおぼろげな灰色でまるで影のようになつていて、僕が食べたサイトはみんな灰色になつた。でも、しばらくすると正常な写真に更新される。きっとサイトの管理人の仕業だろう。不思議なことに食べてしまつたものと同じ写真が掲載されることは二度となかつた。

人、もっと人が食いたい。ついに僕は食うのに困らない人になつた。明日はどんな検索をしてどんな人を食べようか。僕は今日も欲望のままに虫眼鏡とピンセットを動かすのだ。家に一枚だけ残つた写真が写真立てに入つてこちらを向いている。それは、僕が笑つた写真だつた。その前に置かれたグラスに水を注ぐ。たくさん食べたのでのどが渴いた。僕はまた一杯の水で溺れそうになりながらグラスを空にした。

ニュースで行方不明者が多数出でているという報道が盛んにされている。でも、そんなの僕には関係ない話だ。無限連鎖とも思えるネットの世界で僕は食物連鎖の頂点に立つたのだ。美食家になつた僕

は世界中の味を知っている。しかし、ただ一つ試していいない味がある。それは自分の味だ。自分自身を食べたらどんな味がするだろうか。いつもそんなことを考えながらグラスの水に溺れるのだが、今日はいつもと違つてグラスには酒が入つていて。グラスの酒が減るにつれて僕の美食家としての好奇心がむくむくと入道雲のように大きくなつていく。写真立てに手をのばす。カチヤリと銀色の道具が静かな音を立てた。そして、僕はついに灰色に、ぼんやりと輪郭のよく分からぬ灰色になつてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3192h/>

銀色の道具

2011年1月16日02時27分発行